



中国・河南省魯山

企業の妙味か、茨道か 水道民営化の重み

世界銀行タスク・チーム・リーダー 鎌田卓也

WATCH FIRE

【開発途上国の明日】



魯 山は、河南省の省都である鄭州から高速道路で南西へ1時間半ほどのところに位置する人口12万人の町である。写真の「魯威平頂山水務有限公司」は、シンガポールの企業が出資する水道経営会社だ。

魯山では住民の8割が井戸水に頼っており、農業や排水で汚染が進む中水道の拡張工事が急務である。財政難に悩む行政当局は資産リースのような契約でこのプロジェクトを民間に一任した。新施設の設計と建設完成後の運営・補修、資金調達と財務運営などが委託されている。水道会社は収益の一部を受け取り、29年後に資産を返還する。設計等の準備は終わり、まもなく着工の予定だ。

このような例は中国では珍しくない。資金調達と技術導入を狙いとして10年前から民営化を推進しているためだ。政府のお墨付きで安定収入が見込める公共事業は進出企業にも魅力がある。現在、300以上の都市で日欧の商社や大手水道会社などが経営参加していると推測される。もちろん問題がないわけではない。設計ミスで運転休止を余儀なくされたり、需要の誤測により大赤字を被ることも。収益保証の契約条項に違法判決が下された例もある。合弁解消や撤退も少なくない。

水道民営化に成功の保証はない。が、住民に対する責任は重い。同社の成功を祈りたい。(写真も筆者)